

古代ギリシアにおける教養・教育の理念に関する研究 (4)

—W. イェーガーの『パイデア』に学ぶ—

A Study on the Ideal of Culture in Ancient Greece(4): Learning from Werner Jaeger's *PAIDEIA*

畑 潤

Jun HATA

I. 本研究の課題と構成について

1. 本研究の経緯について

本研究は、ドイツの古代学者である W. イェーガー (1886～1961) の著書『パイデア—ギリシア的人間の人格形成—』(*PAIDEIA DIE FORMUNG DES GRIECHISCHEN MENSCHEN*) の G. ハイエットによる英訳版『パイデア—ギリシア的教養の理念—』(*Paideia: The Ideals of Greek Culture*) から学ぶことを主題とし、下記の研究に継続するものである。

- ・「教育学と教養理念の起源に関する研究—W. イェーガーの『パイデア』から学ぶ—」(都留文科大学大学院紀要第 15 集、2011 年 3 月、所収)
 - ・「古代ギリシアにおける教養理念に関する研究 (2) —W. イェーガーの『パイデア』の「序論」から学ぶ—」(都留文科大学大学院紀要第 19 集、2015 年 3 月、所収)
 - ・「古代ギリシアにおける教養理念に関する研究 (3) —W. イェーガーの『パイデア』から学ぶ—」(都留文科大学研究紀要第 83 集、2016 年 3 月、所収予定)
- *小論の<注記と考察>などで上記拙論に言及するときは、本継続研究 (1)、(2)、(3)、というように記す。

2. 小論の対象と構成について

小論は、『パイデア』第Ⅱ巻(第3編)の「1 The Fourth Century (前) 4世紀」と「2 The Memory of Socrates ソクラテースの思い出」の導入部、の二つを対象とする。

「Ⅱ. 4世紀」は、小論として章を設定して(1章から4章まで)訳出し、その章ごとに、<注記と考察>として私の注記的なものと簡略な考察事項とを付し、おしまいこのパートの<全体の考察[A]>を置く。訳文の章の区切りは私の判断によるもので、その章名も私が便宜的に付したものである。段落の設定などは、ドイツ語版と英訳版との間に若干の違いがあり、小論では英訳版に準じた。

「Ⅲ. ソクラテースの思い出」は、小論として章を設定して(1章から3章まで)訳出し、その章ごとに<注記と考察>、そしてこのパートの<全体の考察 [B]>を置く。《原文注記》のナンバーは原文通りとして、Ⅲ章の<注記と考察>の後にまとめて配置する。

なお『パイディア』第Ⅱ巻は、英訳版は第3編 In Search of the Divine Centre (神なる本源を求めて)とされているが、ドイツ語版では第3編として(英訳版第3編・第4編を一つのものとして) DAS ZEITALTER DER GROSSEN BILDNER UND BILDUNGSSYSTEME (偉大な教育者と教養学説の時代)となっている。

3. テキストと論述の仕方

イ) 本継続研究ではテキストとして、ハイエットによる英訳版を用いる。

第Ⅰ巻：1945年：英訳版第2版：注記付き：ドイツ語版第2版からの翻訳、及び1965年版、及びペーパーバック1965年版、

第Ⅱ巻：1944年：第2刷、及び1957年版、

第Ⅲ巻：1944年、及び1961年版、及びペーパーバック1986年版

参照するドイツ語版は、一卷にまとめられた復刻版(1989年、初版は1973年)を用いている。

ロ) キータームなどは、小論の趣旨に関係してくるので、ドイツ語版との対応があるものは適宜ドイツ語を挿入し(格変化などは原文中のまま扱った)、その訳を付すようにした。ギリシア語、ラテン語の引用文に関しては、私の素養の不足からくる誤りを避けるために、また文意は前後によって類推できるので、訳出しないでおいた箇所がある。文章中の参照事項の多くは、訳すことなくそのまま記してある。センテンスの区切りや改行などは、英訳版に準じることとした。

ハ) 小論での記述の仕方は、以下のとおりである。

- ・テキスト中の挿入の— —は、そのまま— —で表す。
- ・テキスト中の()は、そのまま()で表す。
- ・テキスト中のイタリック体は< >で記す。
- ・テキスト中の語句強調の‘ ’は、そのまま‘ ’で表す。
- ・テキスト中の古代ギリシア語、ラテン語はそのまま記し、その訳を()に記しておく。
- ・人名等については、「ホメロス」はホメーロス、「ソクラテス」はソクラテース、「アリストテレス」はアリストテレーズ、…といったように表記する。
- ・paideiaに関しては、それが主題なので、書名は『パイディア』のままとするが、訳文と考察では「パイディア」と表す。
- ・「NOTES」(「ANMERKUNGEN」)は、本継続研究では《原文注記》として<訳文>の各章の末尾に記すこととする。

ニ) <注記と考察>における人名等の確認は、出隆・岩崎允胤訳『エピクロス』(岩波文庫、1959年)、藤沢令夫訳『パイドロス』(岩波文庫、1967年)、『哲学事典』(平

凡社、1971年)、『プラトン全集 別巻』(岩波書店、1978年)、伊藤貞夫『古典期アテネの政治と社会』(東京大学出版会、1982年)、古川春風編著『ギリシャ語辞典』(大学書林、1989年)、『岩波 哲学・思想事典』(1998年)、國原吉之助著『古典ラテン語辞典』(大学書林、2005年)、安達正『物語 古代ギリシア・ローマ事典』(彩流社、2008年)、松原國師『西洋古典学事典』(京都大学学術出版会、2010年)、その他、を参照している。

なお<注記と考察>における本文中の人名等の確認記述は、本継続研究では重複を避けることを基本とするが、イエーガーの論述は古代社会についての素養を前提にして書かれているので、それぞれの部分の論述を理解するために重複する注記も記した。その場合はできる限り、関連する注記の箇所を示すようにした。

II. 「(前) 4 世紀」(英訳版第 3 編の 1 The Fourth Century)

4 世紀

1. アテーナイの衰亡と道徳的規範

<訳文>

前 404 年に、ギリシア諸国家間のほとんど 30 年間にわたる戦争の後、アテーナイは倒れた。ギリシア人の偉業のもっとも栄光に満ちた世紀は、歴史に知られるように、もっとも暗い悲劇に終わった。⁽¹⁾ ペリクレス⁽²⁾ の帝国は、かつてギリシアの国土に打ち立てられたもののなかでもっとも偉大な政治的建造物であり、実際それは、一時は、ギリシア的教養 (Greek culture, der griechischen Kultur) にとって、永久の運命的な住まい (the destined home, irdisches Gehäuse この世の住処) となるように思われていたのである。アテーナイの斃れた兵士たちへの葬送の辞、それはトゥーキュディデースが戦争の終結後にただちに書きとめたものでペリクレスが語ったことにしているが、そこでは、彼はまだアテーナイを、あの燦然たる輝きの最後の栄光に照らされたものとして見ている。彼の言葉を貫いて、短くはあったがしかし輝かしいあの夢、アテーナイの創造的精神にふさわしい夢—つまり国家を、それが力と精神を恒久の釣り合いをもって保持できるように巧みに建設するという夢、の熱狂のようなものがまだ赤く燃えている。彼があの演説を作成したとき、彼は、彼の同時代のだれもが学ばねばならなかった逆説的な真理を、つまり、この世の権力のもっとも堅固なものでさえ空中に消えなければならないということ、見たところでははかない精神の輝きだけが長く持ちこたえ得るということを知っていたのである。アテーナイの発展が突如逆転させられたかのように思われた。アテーナイは 100 年前に、つまり割拠する都市国家の時代に立ち戻らされた。ペルシアに対する勝利は、その勝利ではアテーナイはギリシア人の指導者であり戦士でもあったのであり、アテーナイに、ギリシア人に対する覇権を持とうと熱望することを許したのであった。⁽³⁾ 今や、アテーナイがそれを獲得できようかという直前に、それはアテーナイの両腕からもぎ取られたのである。

ギリシア世界は、アテーナイの悲惨な崩壊によって震撼させられた。それは、ギリ

シア諸国家の間に巨大な溝を残したのであり、その溝を埋めるのは不可能だということが分かった。しかしその敗北の倫理的、政治的な影響が、国家がそれなりにギリシア人に何がしかの実在性と意味を持ち続ける限り、感じられた。最初から、ギリシア文明 (civilization, Kultur 文化) は都市国家の生活と分かちがたく結びついていたのであり、その結びつきはアテーナイにおいてはもっとも緊密であった。それゆえに、破局の影響は、不可避免的に、単なる政治的なものをはるかに超えていた。それはあらゆる道徳的規範を揺るがせ、信仰の核心に打撃を加えたのである。もしその災禍が修復され得るとすれば、その過程は宗教と道徳から出発しなければならなかった。⁽⁴⁾ この認識は、哲学者たちの理論化と普通の人の日々の生活との双方のなかに自ずと湧いてきたのであり、そのゆえに、四世紀は、絶えず内面的にも外面的にも再建を目指して努力する時代であった。しかしその打撃が非常に深かったので、今日から見ると、ギリシア人の生得的に備わっているこの世の価値についての信頼、つまり彼らが‘最高の国家’、‘最高の生活’を、今ここに生み出すことができるという確信が、そもそも、本来の純粹さと活発さのうちに再生されるような経験が役に立たなくなっても存続し得たかどうかは、まさにその最初から疑わしく思われる。ギリシア人の精神が初めて自らの内側に向けられるようになったのは一続き諸世紀を貫いてますますそうなるのであるが、そのような苦悩のときのことだった。⁽⁵⁾ しかしながらあの時代の人間は、プラトーンでさえも、自分たちの職務は実際的な (practical, reale) ものであるとまだ信じていた。彼らは世界を、<この this >世界を、変えなければならなかったのである—たとえ彼らがそのことを完全にやっていくことは、当座はできないにしても。そして今では実践的な (practical, praktischen) 政治家たちでさえ、(いくぶん異なった意味においてであるが) そういうやり方で、自分たちの使命を思い描いたのである。⁽⁶⁾

<注記と考察>

- (1) 前5世紀はアテーナイの栄光の時代とされるが、27年にわたるペロポネネソス戦争 (前431年～前404年) において、前404年にアテーナイはスパルターに伏する。この年、アテーナイは「30人僭主」の支配となる。

なお周知のことであるが、ソクラテースは裁判において、自らのペロポネネソス戦争における三度の従軍のことにも、また「30人僭主」の権力下での試練のことにも、言及している (久保勉訳『ソクラテースの弁明 クリトン』岩波文庫、1964年、初版は1927年)。

- (2) ペリクレーズ：前495年頃～前429年。アテーナイの黄金時代の傑出した政治家。なおトゥーキュディデースの『戦史』に記されている‘ペリクレーズの「葬送の辞」’は、教養・教育思想としても重要な意味をもつ感銘深いものであるが、イエーガーによれば、それはトゥーキュディデースが自分の考えをペリクレーズに語らせているもの、ということである。拙論「ヒューマニティの思想の現代性について—ギリシア的パイデイアー (教養) の再生を考える—」(『教育科学研究会編『教育』2008年2月号、所収)を参照のこと (その拙論ではペリクレーズを主語として引用した)。なおトゥーキュディデースについては、次節の<注記と考察> (2)、(4)を参照のこと。
- (3) 前478年に、アテーナイはギリシア連合の統率権を手中にし、エーゲ海の主導権を

掌握する。

- (4) この前後は、なぜ都市国家アテナイの政治的危機の時代に深い人間探究が遂行されていったのかということについての説明になっている。このことは、私たちがどうしても知りたい重要事である。
- (5) 共同社会と人間を、自覚的、意識的に探究していくことになった外的・内的契機のこと。古代ギリシアにおいて「哲学」が生まれていく理由を考えさせてくれる。
- (6) イェーガーは、プラトンの、辛酸をなめることになったシケリアー行きのこと（『第七書簡』、『プラトン全集 14』岩波書店、所収）、さらにプラトン（たち）とは教養理念をめぐる論争関係にあるイソクラテース（たち）の政治的弁論術のことも念頭に置いているのであろう。ここは、現実世界そのものの改革への意思と、真理探究への情熱との関係をめぐる社会的考察となっている。なおイソクラテースについては、第Ⅱ章 4 節〈注記と考察〉(3)、6 節〈注記と考察〉(1) を参照のこと。

2. アテナイの再建とパイデイアーの意識

〈訳文〉

アテナイ国家によってなされた外的な回復のスピードと、アテナイ国家が活動させた物質的、精神的資源の膨大な量は、ほんとうに仰天させるようなものだった。⁽¹⁾ この極度の危機は、アテナイの歴史の他のいかなる場合よりもいっそう明瞭に、アテナイの真の強さが一国家としてであれ一精神の強さにあるということを示した。アテナイを回復の道へと辿らせ、アテナイの最大の非常時に、アテナイから離反したギリシア人たちの心を取り戻し、全ギリシアにアテナイが生き延びる権利をもっていることを、たとえそのことを主張する力を欠いているときでさえ証明したのは、その精神的な教養 (spiritual culture, geistigen Kultur) であった。それゆえに、(前) 四世紀の最初の 10 年の間にアテナイで起きた知的な展開 (the intellectual movement, der geistige Prozeß 知的なプロセス) は、政治的な見地からでさえ、我々の興味の中心を占めるはずである。トゥーキュディデースが、ペリクレーズの統治下のアテナイの力が最大であった時代をふりかえり、あの力の精髓は人間の精神 (the spirit, den Geist) であるということを見たとき、彼は正しく見ていたのである。⁽²⁾ 今や、いつものように—それどころか、ますますということであるが—アテナイはギリシアの教養の中心 (the cultural center, das Bildungszentrum)、つまりギリシアの〈paideusis 教育の場〉であった。⁽³⁾ しかしその全精力は、歴史によって新しい世代へと課せられた重い仕事、つまり国家と全生活を堅固で永続する基盤の上に再建するという仕事、に集中されたのである。

戦争の間、それどころかその勃発以前から、生活の構造的な変化がこの過程を引き起こしていたのであり、それによって相当高度な知性の全精力が国家に焦点化させられた。その方向を指さしたのは、ソフィストたちの新しい教育理論や試みだけではなかった。詩人、雄弁家、そして歴史家たちもまた、いっそう抗しがたいように、一般の風潮に巻き込まれたのである。大規模な戦争⁽⁴⁾ の終結のときには、若者たちは、この 10 年の恐ろしい経験によって、現下の職務 (the task, der Not 危急) に全力を傾けるように訓練されていた。もし現在の国家が彼らに、為すに値しない社会的、政治的な仕事をするようにと与えれば、彼らの活動力 (energies, Bemühungen 尽力) が何か知的な (intellectual,

geistigen) はけ口を捜し求めるのは不可避であった。⁽⁵⁾ われわれはすでに、(前) 5 世紀の芸術と思想の全体にわたって教育を強調する動向を、世紀全体の政治的動向から適切な教訓を引き出している、トゥーキュディデースの偉大な『歴史』まで、見てきた。同様の考え方の風潮 (current of ideas, Ideenstrom) が、今や再建の大きな流れへと注ぎ込んでいる。目下の政治的、社会的危機は、それが引き起こすあらゆる苦しみを伴いながら、教育を強調することを著しく増大させ、その重要性を強め、その意味を豊かにした。⁽⁶⁾ このようにして、パイデアーの概念は新しい世代の精神的な目的 (purpose, Wollen 意志) を表す本物の表現となった。4 世紀は、パイデアーの歴史にとって、もしわれわれがそれを <a conscious ideal of education and culture 教育と教養の意識的な理念> (einem bewuten Ideal der Erziehung und Kultur) の成長を意味するととらえるならば、古典的な時代である。⁽⁷⁾ それがああ危機の (critical, so problematisches 非常に問題をはらんだ) 世紀に当たるのには納得のいく理由があった。ギリシア人の精神を他の諸民族ときわめて明瞭に区分するのは、その問題のまさにあ意識性 (awareness, Wachsein) なのである。ギリシア人が自分たち自身の教育と教養 (education and culture, Erziehung und Kultur) の意味を、続く諸民族の教師となるほど明瞭に理解することができたのは、単純に、ギリシア人たちが、彼らが直面した輝かしい 5 世紀の全般的な知的 (intellectual, geistigen)、道徳的 (moral, sittlichen) 崩壊におけるあらゆる問題、あらゆる困難に対して十分に敏感 (fully alive, das vollwache Bewußtsein 十分に目覚めている意識) であったことによる。ギリシアは西欧世界の学校である。⁽⁸⁾

<注記と考察>

- (1) 前 404 年にアテーナイはスパルターに敗北し、「スパルター軍の進駐と監視のもと」で「30 人僭主」と呼ばれる寡頭派政権が生まれ恐怖政治を経験する。しかしアテーナイは翌前 403 年には「30 人僭主制」を廃止し、民主制を復活させる。前 4 世紀アテーナイの民主政は、内部的な矛盾を生み出しながらも、なお「安定した歩み」を続けたとされる。(伊藤貞夫『古代ギリシアの歴史—ポリスの興隆と衰退—』講談社学術文庫、2004 年、底本は 1976 年)
- (2) トゥーキュディデース：前 464 年頃 / 455 年頃～前 401 / 395 年頃。アテーナイ生まれの歴史家で、未完の『歴史』(『ペロポネネーソス戦史』)の著者。
ここでのイェーガーの叙述を理解するために確認しておく、ペロポネネーソス戦争の終結(アテネの降伏)が前 404 年で、プラトーンは 24 歳前後であり、ソクラテースの刑死が前 399 年で、プラトーンは 29 歳前後である。なお、イソクラテースはプラトーンより 8 歳くらい年長である。
- (3) $\pi \alpha \iota \delta \epsilon \upsilon \sigma \iota \varsigma$ パイデウシス：教えること、教育、教養、教育の手段・場。
- (4) 「大規模な戦争」は the great war (des großen Ringens 大規模な戦い) の訳である。トゥーキュディデースはその著『歴史』(『ペロポネネーソス戦史』、久保正彰訳『戦史』(岩波文庫；上・中・下))において、今次大戦が未曾有の規模のものになるであろうと予測し、その「歴史」を綴る決意を示している。ここの「大規模な戦争」は、トゥーキュディデースが記しているペロポネネーソス戦争のことである。なおこの書は歴史書として抜きんできた性質のものとなっており、全編にわたって今日も瑞々

しい。拙論「想起に関する研究—社会教育（自己教育・相互教育）の原理をたずねて—」（『都留文科大学大学院紀要第7集』2003年3月、所収）の第八章「人間の本性についての洞察—批判精神の所在—」を参照のこと。

- (5) 未曾有の経験をした青年たちは、深い本質的なものを渴望していた、という意味に解され、この件は青年期論、教養・教育論として重要な意味をもつ。なお、〈注記と考察〉の(2)に連続することであるが、プラトンはペロポネネソス戦争の末期に3度出陣している（松原國師『西洋古典学事典』）。彼がソクラテースに出会うのは20歳ころ、アテネの降伏の年（前404年）には24歳前後ということになる。イエーガーがここで述べている「若者たち」に、当然プラトーンも入るであろう。
- (6) この時期にギリシア人は、「教育（education, Erzieherischen）」の、今まで気づいていなかった（ungeahnte 予想外の）深い意味を見出していったのである。
- (7) 「教育」「教養」を意識的、根源的に問い直すところに「パイデイアー」概念が成立している。
- (8) 都市国家アテネは前5世紀末に、ペロポネネソス戦争を経て傾き崩壊していくが、その経緯で、知的・道徳的衰退を経験していくことになる。ギリシア人たちはその歴史的危機を意識的にとらえ、教育・教養を探究していったという。

3. アテーナイの歴史的試練とパイデイアーの普遍性

〈訳文〉

知的な見地からすれば（前）4世紀は、5世紀あるいはそれ以前の世紀の、潜在的な、もしくは部分的に実現された、見込みをもっていたことがらの履行である。しかし別の面で見ると、それは途方もない激変の時代である。先行する世紀は、民主主義（democracy, der Demokratie）を完全なものにする仕事、つまり全自由市民へと拡張された自治という理想（the ideal of self-government extended to all free citizens）を獲得するという仕事にささげられてきたのであった。たとえその理想（the ideal、Ideals）が決して十分には実現されなかったとしても、またたとえ実際の政治の世界でのその可能性（possibility, Durchführbarkeit 実行可能性）に対し多くの厳しい反論が持ち上がってきているとしても、それでも世界が、十分に自己を意識し自己に責任をもつ人格（a personality fully self-conscious and responsible to itself, der selbstverantwortlichen menschlichen Persönlichkeit 自己に責任をもつ人間人格）という概念を創造するのは、そのおかげなのである。⁽¹⁾4世紀の再建されたアテーナイでさえ、ほかならぬ基礎、つまり法の下での平等—〈isonomia⁽²⁾〉の上に建設され得たのである。アテーナイはアイスキュロス⁽³⁾の時代の精神的な高貴さは失ってしまっていたが、第一級の教養を求めることが全共同社会にとって大胆すぎるとは見えなかったときには、⁽⁴⁾あの平等の理想は、そのころにはもう古典的（classical, klassisch）になっていたのである。アテーナイ国家は、圧倒的な物質的優位性にもかかわらず、自らの敗北が、その政治構造における弱点を暴露してしまったという事実にはまったく注意を払おうとしないように見えた。⁽⁵⁾スパルター人の戦勝の真の痕跡は、アテーナイの政治⁽⁶⁾ではなく、アテーナイの哲学とパイデイアーに見出されるべきである。スパルターの見地との知的な論争は4世紀全体をとおり、アテーナイの独立した民主的な都市国家としての終焉まで、アテーナ

イを訓練した。⁽⁷⁾ 問題 (problem, die Frage) は、アテーナイがスパルターの戦勝という事実を甘受すべきかどうか、またアテーナイの法と制度 (laws and institutions, die freien Einrichtungen 自由な慣行) を適応するように変更すべきかどうかという程度のことはなかった。もちろん、そのことは敗北直後の反動であったのだが、しかし戦争終結の一年後、‘三十人僭主’は追い出され、反動は速やかに止まった。だが、民主制が‘復活され’、大恩赦が宣言されたときでさえ、問題 (problem, das Problem) が解決されたわけでも、忘れられたわけでもなかった。⁽⁸⁾ それは単純に別の領域に、つまり現実的な政治の領域から内的な再生 (regeneration, Regeneration) への知的努力の領域に、移行しただけであった。人々は、スパルターはある種の体制というよりは、情け容赦なく (relentlessly, äußerster 極度の) 首尾一貫した論法で成し遂げられる、ある種の教育制度だと思ふようになった。スパルターの強さは厳しいしつけ (rigid discipline, strengen Zucht) にあった。しかし民主主義もまた、人びとは自らを統治する (ruling, regieren) ことができるというその楽天的な信念により、人びとはみな高度に教育されるべきである (educated, der Bildung) ということを決して疑わなかった。このことは当然にも、教育は、世界、つまり政治的世界が (as in Archimedes' epigram アルキメデスの警句にあるように) 動かされ得るような槌子の支点にされるべきであるということを示唆した。⁽⁹⁾ これは、大衆をとりこにするように計算された理念 (an ideal, Rezept 処方箋) ではなかったのだが、しかしそのことにより、その理念は精神的な指導者の想像力 (imagination, die Phantasie) をいっそう深くかきたてた。四世紀の文献 (the literature, der Literatur) がそのことを、ありとあらゆるニュアンスのなかに示しており、それは、集団教育のスパルター人の原理を無邪気にも無批判に賛嘆することから、その原理を完全に拒否し、教養 (culture, der menschlichen Bildung) についての、また個人と共同社会との関係についてのいっそう新しくいっそう高遠な理念 (ideal, Ideal) によって取り換えることまで、さまざまにあった。また他に、戦勝者たる敵の馴染みのない理念 (ideals, Staatsgedanken 国家についての観念) でもなく、また自分たち自身の創造物としての哲学的理想郷 (Utopia, Ideal 理想郷) でもなく、自分たちアテーナイの過去の栄光を説く者もいる。振り返りながら、彼らは歴史を変形しようと努めるのであり、しかもしばしば彼らが賞賛し復興させようとする輝かしい歴史的な過去というものは、単に自分たちの政治的な主義の反映にすぎない。⁽¹⁰⁾ それらの多くは、ロマンチックな好古趣味の (antiquarian, restaurativen 復古的な) 夢である。しかしそれは、まぎれもなく容赦のない現実主義の特徴を含んでいるのである—というのは、それはいつも、現今とその不十分な理想 (ideals, Ansichten 見方) のしんらつな批評から出発しているからである。そしてこれらのすべての教説は、教育的な努力の形 (form, die Form)、つまりパイダイアーの形をとるのである。

4世紀の人びとは国家と個人の関係について懸命に考えたのであるが、それは彼らが、個人の魂のなかの倫理的な改革から出発して、国家の作り直しをしようとしていたからである。がしかし、また別の理由もあったのである。つまり彼らは、個々人の市民生活が社会的、政治的要素によっていかに多く影響を受けているかを理解するようになっていたのである—いつも諸都市国家からなる一国民 (a land, einem Volk) であり続けてきたギリシアにおいては当然のこととして。国家をよりつよく、より優れたものにする手段として新しい型の教育を生み出そうとする試みは、不可避的に、彼らに個人 (individual,

Individuum) と共同社会 (community, Gemeinschaft) のそれぞれの相互の影響を意識させる運命にあった。⁽¹¹⁾ 彼らは、それまではまったく私的な仕組みとして営まれてきたアテーナイの教育は、基本的に間違っており効果的ではなく、したがって公共の (communal, öffentlichen) 教育に取り換えられるべきだと自然に考えるようになった。国家それ自身は、この要求に答えるための方策は何もとらなかったが、哲学者たちがそれを取り上げ、何とかそれを普遍的に受け入れられるようにした。都市国家の政治的独立性の崩壊でさえ、その重要性やその意味をいっそう明瞭に照らしただけであった。ここでも、歴史ではよくあることだが、救済になったかもしれない知識は、来るのが遅すぎた。カイローネア⁽¹²⁾ の破局がきて初めて、アテーナイは徐々に、自分たちの国家はパイデアーの理念、つまりアテーナイの精神にふさわしい教養の理念で充たされるべきだということを理解したのである。弁論家で立法者であるリュクルーゴスの、現存する唯一の演説 (< Against Leocrates > 「レオークラテース弾劾」)⁽¹³⁾ は、あの愛国的な (patriotic) 道徳的再生 (regeneration, inneren Reform 内的な改革) の記録 (document, ein Denkmal 記念碑) である。彼は、アテーナイの人々を再教育するためにデーモステネース⁽¹⁴⁾ の奮闘を取り上げ、それを組織化するための法制定を提案することにより、それを単に即興的なもの以上のものにしようとした。しかしこのことは、四世紀の間に作られた教養 (paideia, der Paideia) の偉大な学説 (systems, Systeme) が、それは思想の自由 (freedom of thought, der Denkfreiheit) の保護のもとに発達したのではあるが、その当時のアテーナイの民主制に知的に根ざしているわけではなかった、という事実を変えることはない。⁽¹⁵⁾ 敗北という悲劇的結末と民主主義がもつ精神的な困難さとは、確かにあの一連の論考 (reasoning, dem Denken 思考) に最初の刺激を与えたのであるが、しかしそれが動き始めてからは、それは、伝統によって設けられた限界の範囲に閉じ込められていることはできず、また自らを、伝統を擁護することに限定することもしなかった。それは自らの道を辿り、まったく自由に (with perfect liberty, ungehemmt なんの束縛もうけずに) 新しい理念的な学説を作り出した。⁽¹⁶⁾ 宗教や倫理においてだけではなく、政治や教育においても、ギリシア精神は、今この場を超えて高く舞い上がり、独立した精神的世界 (an independent spiritual world, seine eigene unabhängige innere Welt) を自ら創造した。〔以下の文章は英訳版で加筆されたもの。〕その新しいパイデアーに向けての旅は、はるかに新しく高遠な国家と社会の理想が必要であるという認識から始まったが、しかしそれは新しい神を探究することで終わった。4世紀のパイデアーは、地上の王国が塵の中に吹き飛ばされるのを見たあと、自らの住処を天の王国に定めた。⁽¹⁷⁾

<注記と考察>

(1) 「全自由市民へと拡張された自治という理想」は、ドイツ語版では【Ideals einer auf alle freien Bürger ausgedehnten Aristokratie】(全自由市民へと拡張された貴族政政体という理想) となっている。

アテーナイの民主政については、形態として貴族政を保存しながらも「貴族と平民との身分差は縮小の一途をたどり」、古典期のポリスでは「貴族と平民という身分差は実質的意義を失い」、「市民団」としての一体化が達成された、とされる。そして、むしろ「市民」の「非市民」に対する「極度の閉鎖性」の方が眼を惹く、とも評さ

れている。(伊藤貞夫『古典期アテネの政治と社会』東京大学出版会、1982年)

- (2) *ισονομία* イソノミア：同等の権利。
- (3) アイスキュロス：前 525 / 524 年～前 456 / 455 年。アテネの三大悲劇作家の一人。末尾の《原文注記》の〈注記と考察〉(1)を参照のこと。
- (4) イソノミア (同等の権利)、つまり「法の下での平等」の意識は、偉大なギリシア悲劇を全自由市民が当然のこととして享受するようになっていたときには、もう「古典的」(classical, klassisch)になっていた、という。イエーガーはこの箇所直前で、「十分に自己を意識し自己に責任をもつ人格」という概念の創造の源のことを述べているが、アテーナイの民主政の基本原則である「法の下での平等」という理想が、5世紀から4世紀にかけて当然の共同社会原理として受け止められるようになっていた、ということが理解される。
- (5) ここは、ドイツ語版では次の通り。

【Der athenische Staat nimmt scheinbar gar keine Notiz von der Tatsache, daß sein Ideal im Kampf trotz großer materieller Überlegenheit unterlegen war.】(アテーナイ国家はどうも、自分たちの理想が大いなる物質的優越性にもかかわらず戦いにおいて劣っていた、という事実にはまったく目もくれないらしい。)

つまり、アテーナイはスパルターに敗北しても、自分たちの民主政自体に疑問を向けることはしなかった、ということであろう。
- (6) 「政治」は politics の訳で、ドイツ語版では konstitutionellem (憲法の、立憲の) となっている。都市国家の政体 (政治機構・政治体制) のことであろう。
- (7) 前 404 年にペロポネネソス戦争においてアテーナイは降伏し、スパルターが制覇するが、前 403 年には民主政が復活し、経済的にも復興していく。ソクラテースの刑死は前 399 年。マケドニアの侵攻に対するラミア戦争 (前 323 年) における、クランノーンの戦いでのギリシア連合軍の敗北 (前 322 年) によって、アテーナイの民主政は終焉したとされる。
- (8) アテーナイは、スパルターに敗北したという歴史的経験について、それを表層において受け止めることはせず、アテーナイの民主政の歴史を素地に、自ら意識した問いをいっそう本質的なものとし深めていった、ということ。
- (9) スパルターの教育とアテーナイの教育との対比は非常に現代的な意味をもつ。両者ともに、教育と共同社会 (都市国家) の建設との不可分性を観ているが、スパルターが「厳しいしつけ」による国権主義的な教育認識をもっているのに対し、アテーナイは、「人びとは自らを統治することができる」という根本認識のもとに自由の気風を守り続けようとする。
- (10) ドイツ語版では次のようになっている。

【wobei oft das eigene politische Wollen die Form des geschichtlichen Vorbilds annimmt.】(その際しばしば、自分の政治的意図は歴史的な模範という形をとる。)

この件は、現代日本の復古主義そのものを思わせる。
- (11) イェーガーは、共同社会 (都市国家) の改善を目指す「教育」が、「個人」と「共同社会」との相互関係を意識させた、述べている。
- (12) カイローネイア：アテーナイはカイローネイアでの戦いでマケドニアに敗れ (前

- 338年)、マケドニアがギリシア本土を支配する。
- (13) リュクルーゴス：前390年頃～前324年頃。アテナイの政治家、弁論家で、「哲学をプラトーンに、修辞学をイソクラテースに」学んだとされる。デーモステネースとともに反マケドニア運動の側に立った。「レオクラテース弾劾演説」(前331年)は、「カイローネイアの敗戦(前338年)後逃亡して前331年頃に帰国した商人を訴えた」もの(松原國師『西洋古典学事典』)。
- (14) デーモステネース：前384年頃～前322年。アテナイの政治家、弁論家で、反マケドニア運動を主導した。
- (15) アテナイの前四世紀の教育学説は、アテナイの政治的民主政の実状と一体的なものとして考究されていったわけではない、という重要な事実の指摘である。
 そもそもアテナイには、ソクラテースが刑死する実状があったのであり、あるいはプラトーンが「第七書簡」で、国政の現状を憂いながら「同志」の必要を語っている件について、訳者(長坂公一)が「この容易ならぬことを可能にするために、やがて慎重で用意周到な対策が講じられる。前388年頃開設される学校アカデメイアが、それである。」と注記しているように(『プラトン全集14』岩波書店)、4世紀の知的探究は、さまざまな矛盾と緊張のなかで遂行されている。それだけに、イエーガーが「…それは思想の自由の保護のもとに発達したのではあるが、…」と短く指摘していることは、本質的な重要性をもつ。
- (16) この末尾の全体は、(一連の)「論考」(思考、思索)が主語となっている。イエーガーはこの前後で、論考・思索が(その芽生えにおける社会性ととともに)独自の生命力をもっていること、ギリシア人の精神が臆することなく自由に思索に向かったこと、を述べている。(ここの「敗北という悲劇的結末」は、ペロポネネソス戦争での敗北と「30人僭主」による支配のこと。)
- (17) イェーガーは、古代ギリシアのパイデイアーの思想が、歴史的条件のもとに生まれながらも (dem Anstoß はずみ、衝撃)、独自の生命力をもってそれを超え、固有の独立した精神的世界 (eigene unabhängige innere Welt) を創造していった(つまり理性的に真理の探究に向かった)、という重要事を述べている。具体的には、プラトーンのイデアー、あるいは「理想国」の探究などを思い浮かべればよいだろう。言うまでもないことであるが、ギリシア人のこの4世紀における探究こそが、人間研究の世界史的な遺産となっていくのである。
 なお英訳版における文章の補いは、ハイエットとイエーガーとの協議により、イエーガーが指示したものと推量される。このような、協議されたと推量される箇所は、他にも見出されるが、基本的には英訳版を信頼してよいということである。本継続研究(3)の第Ⅲ章1節(ロ)を参照のこと。

4. 「詩歌」に対する「散文」の勝利

<訳文>

文学 (literature, der Literatur) の外的な発展においてさえ、われわれは一つの終わりを、そして一つの新しい始まりを見ることが出来る。⁽¹⁾ (前) 5世紀までに形作られた偉大な詩的形式—つまり悲劇と喜劇—は、もちろんまだ利用されたのであり、というのは、そ

れらは伝統の威光を保持していたからであって、驚くべき数の尊敬すべき詩人たちがその形式で書き続けた。しかし悲劇の力強い靈感は消え失せていた。今や詩は、その精神的な指導力を失った。ますます、公衆は前世期の傑作の定期的な再演をもとめ、ついには、それは法によって指示された。部分的には、偉大な戯曲は教養の古典となっていたのであり—つまりそれらは、ホメーロスや初期の詩人たちのように、学校で学ばれ、演説や論文のなかで権威として引用されたのであり、また部分的には—舞台上で幅を利かせるようになってきているのは演技だということ—それらは、今風の俳優たちが実験するのに有益な道具として、その形式 (form, Form) と内容 (content, Gehalt) には無頓着に使われ、芝居じみた効果の可能性だけに関心がもたれたのである。喜劇は陳腐になった。政治はもはやその主要な関心ではなくなった。四世紀においてさえずれば抜けた数の詩(とくに喜劇詩)がまだ書き続けられていたということを忘れることはあまりにも安易である。しかしこれらの何千もの戯曲はみな消滅してしまった。保存されてきた著作のほとんどは、偉大な散文作家—プラトーン、クセノフォーン⁽²⁾、イソクラテース⁽³⁾、デーモステネース、アリストテレス、などの作品であって、それに相当数の粗悪な精神のものがある。しかしなお、この一見恣意的な選択は正しいのであって、それは4世紀における真に創造的な仕事は散文においてなされたからである。その、詩歌に対する知的な優位性は非常に強烈なものであったので、それは競争相手のすべての痕跡を歴史から究極的に消してしまった。⁽⁴⁾ あの時、そしてそれ以降の時代の人びとに大きな影響を与えたのは、四世紀後半にメナンドロス⁽⁵⁾とその芸術家仲間たちから始まる、新喜劇だけであった。それは、広い公衆に向けて—さらに言えば、その先行者たち(偉大な時代の古期喜劇や古期悲劇)のようにポリスに向けてではなく、自分たちの生活 (life, Leben) と理想 (ideas, Ideen) が作品のなかに反映されている‘教養のある (cultured, gebildete)’ 社会 (society, Gesellschaft) に向けて—実際に語られた最後の様式であった。⁽⁶⁾ しかし時代の真の闘争が、繊細で人間的な (humane, humanen) ことば、つまりこの上品な (decorous, dezent) 芸術の気品のある (civilized) 語らいにではなく、真実のはるかに深い探究に、つまり新しい哲学の散文詩 (prosepoetry, Prosadichtung 散文体文学) である対話篇に現れているのであって、そこでプラトーンとその仲間たちは世の中に、ソクラテースの人生目的探究のもっとも深い意味をあらわにしている。そしてイソクラテースやデーモステネースの演説は、われわれに、ギリシアの都市国家の問題性 (the problems, der Problematik) や苦悩の、その存在の最終的的局面に、参加することを許している。⁽⁷⁾

これらの散文学という新しい様式は、それらの著者の個性 (personalities, die Persönlichkeit) の反映ということ以上のものである。それらは、哲学⁽⁸⁾ と修辭学の偉大な影響力のつよい学派の、強力な政治的、倫理的な運動の、表れであって、その運動に、思索する人間の全精力が集中させられたのである。これらの努力が自分たちのほけ口を見いだす表現形式 (the form, Form) でさえ、4世紀の知的生活を5世紀のそれと区分する。思想家たちは今や、学説をつくり、要綱を発表し、明言された目的のために力をつくす。その当時の文献は、これらすべての学派や主義の対立を具現している。⁽⁹⁾ 彼らはまだ、みな情熱的な若さのなかにあったのであり、彼らの総合的な関心 (general interest, Interesse für die Allgemeinheit 一般性に対する関心) は、彼らの問題 (problems, Probleme) が直接に自分たちの時代の生活から生まれているという事実によっていっそ

う強められた。その全苦闘の焦点がパイデアー (paideia, die Paideia 教養・教育) である。そこにおいて、当時の思想のさまざまな表れ—哲学、修辞学、そして科学—のすべてが、より高い統一性を見いだす。⁽¹⁰⁾ しかもそれらは、実際的な主題のもの—政治学、経済学、法律学、用兵学、狩猟、農学、旅行、そして冒険—や、数学や医学などの専門諸科学、さらにまた彫刻、絵画、音楽といった諸芸術によって結ばれている。それらはみな、あの時代の全ギリシアを訓練した問題 (the problem, Problem) への寄与を申し出ているのである。それらは、性格を形成し (mould, formen) 教養を授ける (impart culture, bilden) と主張する諸力であり、それらは、自分たちの主張が基づいている、その原理を説明すると明言もする。⁽¹¹⁾ この、われわれが論じている時代の生き生きとした内的な統一性は、近年非常に一般的になっているタイプの、単なる形態、つまり文体論的 < eidos, Eidos 形 > あるいは様式を扱う、純粹に文学的な歴史では、把握することも説明することもできない。⁽¹²⁾ しかしあの時代の実際の生活 (the real life, der reale Lebensprozeß 現実の生活過程) がその独特な表現を見いだすのは、真のパイデアーの本質を見極めるといふ、厳しい、しかし気高く熱烈な苦闘のなかにおいてなのであり、あの時代の文学は、あの苦闘に参加する限りにおいてのみ本物である (real, wirklicher Realität 本物の真実性)。散文は、初期ギリシアの詩歌においていよいよ重要性を増していたつよい教育力 (educational forces, erzieherischen Kräfte) と、今やますます人間生活のほんとうの問い (the real problems of human life, die eigentlichen Lebensfragen des Menschen) を扱うこの時代の理性的な思考との間の同盟を通して、詩歌に対する勝利を得た。そして、ついに、文学における哲学的、勧告的 (protreptic, imperative) 本領は、その詩的形式を完全に脱ぎ捨てた。⁽¹³⁾ それは自ら、自身の要求により適う、自分の土俵で詩と張り合えるような—それどころか、基本的に、新しい高度な種類の詩ということであるが—新しい表現形式 (form, Form 形式) を作った。⁽¹⁴⁾

<注記と考察>

(1) ドイツ語版では次のようになっている。

【Schon in dem äußeren Bilde der Literatur ist ein Ende deutlich sichtbar.】(すでに文学の外的な姿に、一つの終わりが明瞭に見える。)

(2) クセノフォン：前 430 年頃～前 354 年頃 (生没年は諸説あり)。ソクラテースの弟子の一人で、軍人、歴史家。『アナバシス』(松平千秋訳、岩波文庫、1993 年)、『ソクラテースの思い出』(佐々木理訳、岩波文庫、1953 年) などの著作がある。第 III 章 1 節 <注記と考察> (5) を参照のこと。

(3) イソクラテース：前 436 年～前 338 年。プラトーンと同時代のアテネの弁論家、修辞学者。アテネに人間教育を目指す高等教育の学校を創設し、多くの人材を輩出した。第 II 章 6 節 <注記と考察> (2) を参照。

プラトーンは対話篇『パイドロス』の最終場面で、次のような、イソクラテースについての高い評価をソクラテースに語らせている。

「ぼくの思うところでは、彼イソクラテースは、そのもって生まれた素質において、リュシ阿斯流の弁論の水準をはるかに抜いてすぐれているし、その上、人がらも

一段と高貴なところがあるようだ。だから、いまに年齢が進むにつれて、もし、彼が現在手がけている専門の言論そのものの領域で頭角をあらわし、かつて言論にたずさわった人たちとくらべて、大人と子供以上の差をつけたとしても、べつに驚くにはあたらないだろう。のみならず、さらに、彼がそれだけの業績に満足できずに、より崇高なある種の衝動にみちびかれて、もっと偉大なものに到達したとしても、それはじゅうぶんうなずけることだ。なぜかという、あの男の精神には、友よ、知に対するひとつの切実な欲求が、生まれつき宿っているのだから。」
(藤沢令夫訳、岩波文庫)

なおイソクラテースについては、「おそらく公表された全作品が残ったものと思われる(異説あり)」ということである(松原國師『西洋古典学事典』)。その21の演説と9通の書簡は、小池澄夫によって和訳されている(『イソクラテス 弁論集1』『イソクラテス 弁論集2』京都大学学術出版会、1998年、2002年)。ところでイエーガーは、この、作品が世界史で選ばれて保存されてきたということ自体を、パイデイアーの歴史的研究の方法として重視している。本継続研究(3)の第Ⅱ章4節<注記と考察>(18)を参照。

- (4) 思想的な表現の主役が詩歌から散文に移行し、その散文形式においてギリシア思想は飛躍的な展開を示した。
- (5) メナンドロス：前342年頃～前291年(没年は諸説あり)。アリストファネースの古典喜劇のあとの、ギリシア新喜劇の第一人者。
- (6) 詩歌が広く公衆に語られ人間形成力としての役割を果たした最後の局面として、「新喜劇」のことが述べられている。その場合も、対象の公衆はすでに社会階層として限定されていたという。教養・教育の探究の深まり(表現様式の変化)とともに公衆との乖離が進んでいった、教養史の重要な歴史的局面的ことが述べられている。
- (7) ドイツ語版には、以下の一文が入っている。
【In den Lehrschriften des Aristoteles öffnet die griechische Wissenschaft und Philosophie zum erstenmal der Nachwelt das Innere ihrer Forschungswerkstatt.】
- (8) 「哲学(philosophy)」は、ドイツ語版では「哲学と科学(der Philosophie und Wissenschaft)」となっている。
- (9) 前4世紀において、思想家たちの知的な営みは組織的、学術的な姿をとるようになったという。ここで言われていることは、古代ギリシアにおけるさまざまな「学派」のことを思い浮かべればよいだろう。このことにより、教育・教養の探究は、新たな段階に入ることになる。
- (10) 前4世紀に高みに達した古代ギリシアの「哲学」「修辞学」「科学」と、「パイデイアー(教養・教育)」との本質的關係が指摘されている。
- (11) 上に指摘された三つの思想領域は、パイデイアーの探究ということで、さらにさまざまな実学、専門科学、芸術とも共鳴し合っていた、という。つまり、それらすべての領野が人間の本質を形成するものとして考えられていた、ということになる。
- (12) ε ι δ ο ς エイDOS：外見、形、形相、理念、性質、本性、見ること。

イエーガーは、前4世紀の思想の「生き生きとした内的な統一性」(その存在につ

いては、私たちはギリシア人が達成していった「哲学」「修辞学」「科学」の高みによって十分了解できる)は、文体論的方法では掴み得ないという。この前後は、イエーガーによる、自らの古代研究方法論からの現代の古代文学研究方法に対するつよい批判となっている。

- (13) 「詩」の「哲学的、勸告的本領」は、ホメーロスの『イーリアス』『オデュッセイア』、ヘーシオドスの『仕事と日』に典型的に表れている。この件は、「詩」から「散文」への移行の本質的な意味が指摘されており、きわめて重要である。
- (14) 新しい表現形式を「散文で」(in ungebundener Rede) 作ったということであるが、ここでは「詩」(文学の本領)との連続性を強調しながら言われている。

5. 知的な社会集団と民衆との乖離

<訳文>

ギリシアの精神生活は、閉鎖的な学派、ないし限られた知的な社会集団 (societies, sozialen Kreisen) のなかに集中されつつあった。それゆえ、そのような学派や社会集団は、新しい教養の活力 (cultural energy, formender Kraft 形成力) や、自分たち自身のより豊かな、より充実した生活を得た。しかし、このことを初期の時代と比較せよ。そのころは、上流の教養 (higher culture, die höhere Gesittung 上層の礼節) は、同一の (one, ganzen) 階層 (たとえば支配的な貴族階級) の保存物であって、あるいは偉大な詩という形をとって、言葉や音楽、踊りや身振りとおして、全国民 (nation, Volk) に分け与えられた。⁽¹⁾ この新しい時代においては、精神は危険なほどに社会から隔てられ、共同社会のなかの建設的な力としてのその機能は致命的な衰弱を被った。⁽²⁾ その衰弱はいつも、詩が知的な創造的な働き、あるいは生活の決定的な発言 (utterances, Aussprache 発声) の、その媒体であることを止めるときに生じるが、またそれがいっそう厳密に理性的な表現形式 (forms, Formen 形式) に道を譲るときにも生じる。⁽³⁾ このことをそれが起きたあとに確認するのは容易いのであるが、変化の過程は確固たる法則に従っているように見え、しかも、それがいったん完成すると、意思で逆転することはできない。⁽⁴⁾ したがって、初期の時代に詩によって非常に豊かに保持されていた、国民 (the nation, das Volk) を全体として形成する力は、教育問題の意識と教育的試みの熱意の増大とともに増大するということはなかった。むしろ逆に、生活をよりつよく縛っている諸力—宗教、道德律、そして‘音楽’、それはギリシア人にとっていつも詩を含んでいたのだったが、それらの力を失うにつれて、それだけ一般大衆は精神の形成的影響力から逃れていくことになった、というのが我々の印象である。⁽⁵⁾ 純粋な泉から手に入れるということはしないで、彼らは安っぽい派手な代用品で満足したのである。国家の中のすべての階層がかつて忠誠を示した規範と理念 (the standards and ideals, Ideale) は、まだ告知されていたのであるが、しかもそれらは豊かにされた修辞的な飾りを伴ってもいたのであるが、しかしそれらに対し実際の注意が払われることはますます減っていったのである。人びとはそれらを耳にするのを楽しみ、一時は心を奪われることもできたが、しかしほとんどの人は、それらに心から感動することはなかったのであり、大部分の人にとっては、それらは決定的な瞬間に役に立たなかった。⁽⁶⁾ 教養のある階層が深い割れ目に橋をかけるよう試みるべきであった、と言うことは容易い。同時代のもっとも偉大な人物で、社会と

国家を建設することに含まれる困難さ (the difficulty, das Problem) を他の誰よりも明瞭に見た思想家は、プラトーンであったが、プラトーンは老年期にその挑戦に応じた。⁽⁷⁾ そして彼は、なぜ自分が全人類のための一つの福音も (a universal gospel, Botschaft) 告げることができないかを説明した。⁽⁸⁾ 彼が代表する哲学的教養 (culture, Bildung) と、彼の偉大な論敵であるイソクラテースによって保持された政治を通しての教育の理念 (the ideal of education through politics, der politischen Erziehungsidee 政治的な教育の理念) との間のあらゆる対立にもかかわらず、この点では、その両者の間に何の違いもなかった。⁽⁹⁾ それにもかかわらず、精神の最高の力を新しい社会 (a new society, eines neuen Ganzen 新しい一つの全体) の建設に役立たせようという意思は、この時代ほど真剣で意識的だったことはない。しかし、それは主として、民衆の教育指導者と支配者の問題を解くことに向けられていたものであり、共同社会の形成に指導者によって使われるべき方法の発見に向けられたのは、そのあとになってからのことである。

<注記と考察>

- (1) ここの主旨は、上層の礼節 (die höhere Gesittung) は社会内部の狭い限定された集団に保有されていたのではなく、社会階層全体で担われ、さらに他の階層とも共有されるようになっていた、ということ (このようなことは、たとえば日本の万葉集や今様の詩の文化、あるいは平家物語などの語りの文化も同様である)。
- (2) 学術集団を形成していく紀元前四世紀は、精神的文化における特殊な隔離性 (閉鎖性) を生み出した、とする。それまでとはまったく異なる、重大な兆候が指摘されている。
- (3) 共同社会のなかの建設的な精神活動が衰弱していく二つの契機が、一般性において指摘されている。この指摘は、現代文化を考えさせる。
- (4) ここは、この文化における変化の過程が、個々の人間の主観を超えたもの (抗しがたいもの) として経験された、ということであろう。
- (5) イェーガーは、共同社会のなかの人間形成力が弱体化していく、その歴史事情を指摘している。
- (6) かつて国民のなかに生きていた「規範と理念」が、人びとの生きる試練のときに役立たなくなっていた、という。ここで指摘されていることは、ソクラテースが対話に情熱を傾けた、その時代環境としても受け止めてよいだろう。

ところでプラトーンは法の制定の考察において、「危機にさいして信頼に値すること (loyalty in danger)」として、「ぜんたいにわたる正義 (complete righteousness)」を述べている (対話篇『法律』、森進一他訳、岩波文庫 (上)、1993年; ロエブクラシカルライブラリ)。対話篇『国家』を頂点とするプラトーンの全探究は、イェーガーがここで述べている時代の課題に向かった結実だと考えてよいだろう。

- (7) プラトーンが80歳で没するまで書き続けていたとされる、最後の対話篇『法律』(前掲) のことと判断される。この大著では、新国家のモデル及びその法制定のことと、一般市民の(幼年期からの) 養育・教育ないし人間形成について、両者が不可分の関係にあるものとして広範に論じられている。イェーガーのここの指摘によって、4世紀の思想形成の事情と、(草稿とみなされている) 『法律』の重要な位置が、鮮やかに理解される。なお『法律』は、J.J. ルソーの『エミール』を思い起こさせる要素

がさまざまにある。

- (8) プラトーンが探究し説いていったことは、「福音」ではなく、一人ひとりが真理への道に情熱を傾けること、善く生きること、自分の「魂」を大事に育てる（世話すること）であった。
- (9) イソクラテース：第Ⅱ章4節〈注記と考察〉(3)、同6節〈注記と考察〉(2)を参照。

6. 都市国家アテナイを超えて

〈訳文〉

攻撃の問題点が移った。⁽¹⁾ この移行は、これは（原理的には）ソフィストたちから始まり、新しい世紀をそれ以前のものから区別するのであるが、同時にそれは、歴史的画期の始まりを示すことになった。新しい高等専門学校や大学（colleges and schools, die Akademien und Hochschulen 高等専門学校や大学）は、例の問題に対するあの新しい心構え（eben dieser Zielsetzung まさにその目標設定）に始まった。それらは閉鎖的な社会だったのであるが、その事実、そのことを不可避とさせたそれらの由来（origin）からのみ理解され得る。もちろん、もし歴史がそれら（die griechischen Hochschulen des 4. Jhrh. 前4世紀のギリシアの諸大学）に力を尽くすよう（zu ihrem ‚architektonischen‘ Versuch それらの‘建築学的な’試みに対して）、より長い時間を認めたとする場合、それらがギリシアの社会的、政治的生活にどのような影響を及ぼし得たであろうかということ言うのは困難である。⁽²⁾ それらの真の効果は、結局、それらが最初に思い描いたものとはまったく異なるということが分かったのであり、というのは、独立しているギリシア都市国家の最終的な崩壊のあと、それらは西欧の科学と哲学を創造し、キリスト教という世界宗教への道を開いたからである。そのことが、4世紀が世界にとっても真の意味である。⁽³⁾ 哲学、科学、それにそれらの変わらぬ敵である修辞学の形式的な力（the formal power, die formale Macht）—これらは、ギリシア人たちの精神的な遺産を東洋や西洋の同時代の人びとや後世の人びとに伝えた、そして何よりも、われわれがその保存について恩恵を被っている、伝達手段（vehicles, die Vehikel 表現手段）なのである。⁽⁴⁾ それらはあの遺産を、それがパイデイヤーの本質を見極めようとする4世紀の奮闘から獲得した形と原理で伝えたのであり—そのパイデイヤーとは、すなわち、ギリシア人の教養と教育（culture and education, kultur und Bildung）の縮図（epitome, den Inbegriff 精華）であって、ギリシアはその標語のもとに世界の精神的な愛を手に入れたのである。⁽⁵⁾ ギリシア国民の見地からすれば、あるいは、この全世界的な（universal, weltgeschichtlichen 世界史的な）栄光を受ける権利のために払った代償は大きすぎるものであったというふうに思えるかもしれない。それにもかかわらず我われは、ギリシア国家がその教養（culture, die Kultur）によって死んだりしていないということを思い出さなければならないのであり、哲学、科学、そして修辞学は単なる形式（the form, die Form）であって、それによってギリシア人の業績のなかの不滅のものが伝えられ得たのである。このように、4世紀の発展の全体にわたって崩壊の悲劇的な影があるが、それにもかかわらず、そこに神意による知恵（a providential wisdom, einer providentiellen Weisheit 神の摂理による知恵）の燦然たる輝きが注がれているのであり、その顔（face, Angesicht）の前ではもっとも天分に恵まれた国民のこの世の運命でさえも、その歴史

的業績の長い生命のなかのたった一日のことである。

<注記と考察>

(1) ドイツ語版では「この、攻撃にさらされる点の移動は…」となっており、内容的に上述のことを受けている。

イエーガーは前段で「精神の最高の力を新しい社会の建設に役立たせようという意思は、この時代ほど真剣で意識的だったことはない。」と述べつつ、「ギリシアの精神生活は、閉鎖的な学派、ないし限られた知的な社会集団のなかに集中されつつあった。」と指摘する(本章5節<訳文>)。その当時の「学派」や「主義」の対立については、「思想家たちは今や、学説をつくり、要綱を発表し、明言された目的のために力をつくす。」と説明している(本章4節<訳文>)。このようにイエーガーは、4世紀のギリシア人の精神的格闘は、都市国家建設の情熱を根底に置きながらも、具体的には「哲学」「科学」「修辞学」の構築という方向をとっていったと述べている。イエーガーはその中心にプラトーンを見ており、次の世代のアリストテレスについては、「アリストテレスと共にパイデアーの概念はその熱烈さの著しい低下を経験する」と指摘している。本継続研究(3)の第Ⅱ章4節<訳文④>、同5節<注記と考察>(2)を参照のこと。

なお廣川洋一は、プラトーンとイソクラテースを軸に古代パイデアーの研究を重ねており、プラトーンのアカデーメシアに焦点を合わせた『プラトンの学園 アカデーメシア』(岩波書店、1980年)、それが『講談社学術文庫』として文庫化されたもの(1999年)、『イソクラテースの修辞学校—西欧的教養の源泉』(岩波書店、1984年)、それが『講談社学術文庫』として文庫化されたもの(2005年)、『ギリシア人の教育—教養とはなにか—』(岩波新書、1990年)、などがある。この『ギリシア人の教育』の「文献案内」では、そのⅠ章について廣川は次のように述べ、イエーガーの『パイデアー』全3巻の所在を紹介している。

「ギリシアの性格の形成」としてパイデアーを規定し、この線にそってホメロスからプラトーンにいたるギリシア精神史を把握しようとする、イエーガーのすぐれた業績がここでは何よりも参照されなければならないだろう。

(2) 前4世紀には複数の高等教育機関が創設されているが、その代表的なものとして、イソクラテースの弁論学の学校の開設(前392年頃)、プラトーン「アカデーメシア」の設立(前385年頃)、アリストテレスのリュケイオンにおける学園の創設(前335年)、エピクーロス(前341年～前270年)の学校「エピクーロスの園」の創設(前307/306)がある。またさまざまな哲学学派が形成されるが、その一つに、ゼーノン(前335頃～前263頃)による「ストアー派」の開設(前301/300年頃)がある。

アテーナイは、「クランノーンの戦い」(前322年)で南下してくるマケドニア軍に敗れ、その民主政が終焉したとされる。なお上記の中で「アカデーメシア」のみは、ローマ皇帝ユスティニアヌスによって閉鎖の勅令が出される紀元後529年まで、900年を超えて存続した。

(3) 西欧の「科学」「哲学」を創造したこと、そして「キリスト教への道を開いた」ことが、4世紀のもつ世界史的意味だという。なお「独立しているギリシア都市国家の

最終的な崩壊のあと」の一文は、英訳版で挿入されたもの。

- (4) ギリシア人たちが生み出した哲学、科学、修辞学は、「ギリシア人たちの精神的遺産」を伝える「伝達手段」であって、その存在によって、彼らの精神的遺産の中核としてのパイデイアー（の思想）が後世へと伝えられてきたという。イエーガーは、古代ギリシアの哲学、科学、修辞学の成立をこのように理解している。
- (5) ここで、「パイデイアー」とはギリシア人の「教養」と「教育」の「縮図」だと言われている。そのパイデイアーの概念は、当時の多面的な営為に統一性を与えているものであり、現代の「文明、教養、伝統、文学」あるいは「教育」といった、なんらかの一つの表現で言い直せるものではないという（本継続研究 (3) の第Ⅱ章3節〈訳文③〉）。

＜全体の考察 [A] ＞

イエーガーは古代ギリシアの思想の核心にパイデイアーを覗いているが、前4世紀はそれが深い実りをもたらす決定的な時代ということになる。つまり4世紀は著書『パイデア』の中でも最重要の時代ということになり、全3巻のうち2巻分が充てられている。本章の「4世紀」は、その論述に向けての概論となっている。古代ギリシア思想を理解していく上で極めて重要な観点が述べられており、ここでは、そのイエーガーの論述内容の特徴を、四つに整理し簡略に確認してみようと思う。

[1] イェーガーの古代研究は「歴史的」方法を重視しているが、「4世紀」の章では、前5世紀から前4世紀へと進むアテーナイの政治的、社会的危機の状況が描かれ、それと本質的な関係があるものとして、この時代の思想的探究の足跡と意味が述べられている。具体的には次のような諸点が論述されている。

第1に、ペロポネネソス戦争という「ほとんど30年間にわたる戦争」において、アテーナイはスパルターに敗北するが（前404年）、イエーガーは「その敗北の倫理的、政治的な影響」の深刻さのことを述べており、「ギリシア世界は、アテーナイの悲惨な崩壊によって震撼させられた。」と言っている。そのようなアテーナイの破局の経験に遭遇し、ギリシア人の心のなかには、彼らの生得的資質であった「‘最高の国家’、‘最高の生活’を、今ここに生み出すことができるという確信」が揺らぎ、彼らの心の内にそれとは異なるものの観かたが湧き上がってきたという。イエーガーは、「ギリシア人の精神が初めて自らの内側に向けられるようになったのは一続く諸世紀を貫いてますますそうなるのであるが、そのような苦悩のときのことだった。」と述べている。つまりギリシア人は、現実の外的な世界そのものではない、現象を見つめ直していく根本の批判の原理の存在に気づいていくことになるのである。（1節）

第2にイエーガーは、アテーナイの「この極度の危機」の局面においてこそ、「アテーナイの真の強さが一国家としてであれ一精神の強さにある」ということを全ギリシアに示したと指摘し、目に見えない「精神的な教養」(spiritual culture, geistigen Kultur) というものが現実に実存している様を説明している。その存在は、歴史的に形成されてきたものであり、イエーガーは「われわれはすでに、(前)5世紀の芸術と思想の全体にわたって教育を強調する動向を、世紀全体の政治的動向から適切な教訓を引き出している、トゥーキュディデースの偉大な『歴史』まで、見てきた。」と著述をふりかえり、「教育

を強調する動向」の歴史を指摘している。その上で、「目下の政治的、社会的危機」は「教育を強調することを著しく増大させ、その重要性を強め、その意味を豊かにした。」と指摘する。つまりこの「4世紀」において、「パイダイアー」の概念が、戦争を経験した若者たち（新しい世代）の、「精神的な目的（purpose, Wollen 意志）を表す本物の表現となった。」と言う。（2節）

第3に、そのパイダイアーの歴史とは「教育と教養の意識的な理念」の成長のことであるが、イエーガーは、それが4世紀という「危機の世紀」において画期をなすことには「納得のいく理由」があるという。それは、ギリシア人を他の諸民族と区別する「意識性」のことであり、ギリシア人たちはこの資質によって、「彼らが直面した輝かしい5世紀の全般的な知的、道徳的崩壊におけるあらゆる問題、あらゆる困難に対して十分に敏感であった」という。（2節）

イエーガーが指摘しているように、彼らの社会観察、人間観察は実にリアルであり、共同社会と道徳性の思考は深いものとなっている（このことはプラトンの諸対話篇にありありと示されている）。

[2] アテーナイはスパルターに敗北し「30人僭主」による恐怖の抑圧を経験するが、一年後には民主制を回復させる。イエーガーは、彼らの教養・教育の学説は、民主主義を完全なものにしていく歴史を前提にし、しかしアテーナイの民主政の実状を超えていくものとして探究されていったと述べている。このことを、四つの点から見ておく。（3節）

第1に、アテーナイが歴史のなかで築いてきた「民主主義を完全なものにする」仕事とは、「全自由市民へと拡張された自治という理想を獲得する」仕事のことであり、「法の下での平等」（イソノミア）を原理としている。そのアテーナイの民主主義の理想は、その現実に対してさまざまな批判があるとしても、「十分に自己を意識し自己に責任をもつ人格」という概念の根拠になっているものだ、という。⁽¹⁾

第2に、アテーナイとスパルターとの対比のことを述べている。アテーナイは、スパルターの強さの根拠をその「厳しいしつけ」に見ていたのであるが、それに対しアテーナイの、その民主主義の「人びとは自らを統治することができる」という「信念」は、「人びとはみな高度に教育されるべきである」ということを仮定していた、とイエーガーは指摘する。その教育は、政治的世界を動かす「樞の支点」にもなっていくようなものであり、そのような教育の理念が「精神的な指導者の想像力をいっそう深くかきたてた」と言う。

第3にイエーガーは、「4世紀の人々は国家と個人の関係について懸命に考えた」と指摘するが、「国家をよりつよく、より優れたものにする手段として新しい型の教育を生み出そうとする試みは、不可避免的に、彼らに個人と共同社会のそれぞれの相互の影響を意識させる運命にあった。」とも述べる。このようにして彼らは、それまでの「私的な仕組みとして営まれてきたアテーナイの教育」は、「公共の教育に取り換えられるべき」だと考えるようになったという。実際には国家は何の方策もとらなかったが、哲学者たちが、パイダイアーの理念の探究として、公共的な教育について思想的に準備をしたと言う。

第4にイエーガーは、4世紀の間に作られた教養の偉大な学説は、それは思想の自由

の保護のもとに発達したのではあるが、「その当時のアテナイの民主制に知的に根ざしているわけではなかった」と述べる。つまりアテナイの歴史的現実が一連の画期的な論考となるものに「最初の刺激(the initial impulse, den Anstoß一押し)」を与えたが、いったん思考が動き始めると、伝統や現状に縛られることはなく、ギリシア精神は「今この場を超えて高く舞い上がり」、「まったく自由に新しい理念的な学説を作り出した」という。このように、古代ギリシア思想は歴史的条件下に生まれるが、それをはるかに超えるものとして探究されていったという。

このようなイエーガーの評価は、プラトンの対話篇『国家—正義について—』(藤沢令夫訳、岩波文庫、上・下、1979年)を一つ読むだけでも十分に了解できる。

[3] イェーガーは、4世紀の思想的変化の本質を、表現形式における「詩歌」に対する「散文」の勝利、という側面からも論じている。(4節)

第1に、前5世紀までに作られた悲劇、喜劇という詩的形式の作品は、4世紀になっても鑑賞され続けたが、新たに創作された膨大な作品群はみな歴史の中で消滅してしまっただけという。唯一の例外的な「新喜劇」も、かつてのように「広い公衆に向けて」ではなく、一定の「教養のある社会」に向けて語られたもの、という。詩人たちに代わって、その時代のギリシアの「問題性や苦悩」を見つめ、「真実のはるかに深い探究」に立ち向かったのは、プラトーン、クセノフォーン、イソクラテース、デーモステネース、アリストテレスらの散文作家たちであった。

第2に、その散文は、初期ギリシアの詩歌において重要性を増していった「つよい教育力」と、新しい時代の人間生活のほんとうの問いを扱う「理性的な思考」とを結びとこに成立していったという。「散文」は「詩」に対し、このように連続性と飛躍性ともをもちている。4世紀の「対話篇」は、新しい「哲学の散文詩」であるという。

第3に、その散文学は、「哲学」「科学」「修辞学」という形をとり「学派」を形成した。4世紀の「思索する人間の全精力」は、それらの「学派」の政治的、倫理的運動に注がれていった。その思想家たちの営為は、「学説をつくり、要綱を発表し、明言された目的のために力をつくす」というものになった。

第4に、そのような「哲学」「科学」「修辞学」は、またそれらにつながる専門諸科学、諸芸術も、時代の「全苦闘の焦点」である「パイデアー(教養・教育)」の探究という内的統一性をもっているという。

第5に、必然性をもって、ギリシア人の精神生活は「閉鎖的な学派、ないし限られた知的な社会集団」のなかに集中されていき、それを担う思想家たちの情熱は、まず民衆の「教育指導者」と「支配者」の問題を解くことに向けられていった。つまり、「国民を全体として形成する力」は、「教育問題の意識と教育的試みの熱意の増大」とともに増大したわけではなかった。イエーガーは、むしろ「一般大衆は精神の形成的影響力から逃れていく」という様相を呈したと見ている。思想家たちの情熱が「共同社会の形成に指導者によって使われるべき方法」の発見に向けられたのは、そのあとのことだという。(5節)

[4] 古代ギリシアの「パイデアー」と「哲学」「科学」「修辞学」との関係について、イエーガーは明確な観方を提示している。(6節)

第1に、パイデアーを核心とする知的探究は、すでに確認したように、4世紀に入

り歴史的な画期を迎えることになる。この時代の思想家たちの情熱は、必然的に新しい「高等専門学校」や「大学」の創設へと向かい、またさまざまな学派を生んでいく。その彼らの「パイディアの本質を見極めようとする」奮闘が、「哲学」「科学」「修辞学」を形成していった。

第2に、「哲学」「科学」「修辞学」は、ギリシア人たちの精神的遺産を伝える、「形」と「原理」をもつ「伝達手段」(表現手段)なのだ、とイエーガーは明確に述べる。パイディアは、この「伝達手段」をもつことによって、ギリシア人の思いをはるかに超えて伝えられることになる。そしてイエーガーは、「ギリシアはその標語のもとに世界の精神的な愛を手に入れたのである。」と述べている。

つまり、ギリシア人が残した精神的遺産は、「哲学」「科学」「修辞学」のそれぞれに止まるようなものではなく、それら総体に刻印されているパイディアの思想にこそ、その生きた本質がある、ということになる。

このようなイエーガーの研究に接するとき(イエーガーが古代ギリシア思想を具体的にどのように論じているのかは今後の検討課題とするが)、一例ということであるが、プラトンの文学性ゆたかな哲学書『パイドロス—美について—』(藤沢令夫訳、岩波文庫、1967年)を、近現代的な「専門性」を超える本質的な魅力をもつものとして思い起こす。⁽²⁾

<注記>

- (1) 日本国憲法の第13条(個人の尊重、幸福追求権、公共の福祉)と第14条(法の下での平等、貴族制度の否認、栄典)とが、思想的に分かちがたいものとして成り立っていることが理解されてくる。
- (2) イエーガーは、「この本は学者にだけではなく、千年間の文明を維持しようとする我々の時代の奮闘のなかにあって、ギリシアに近づく術を再発見しようとするすべての人びとのためにも向けられている。」(本継続研究(3)の第Ⅱ章1節)と記している。この「ギリシアに近づく術」への関心をもつか否かは、すべての文化的営みにとって、それが根をもつものなのかどうかの試金石となるだろう。(〈全体の考察 [B]〉 [4]を参照)

Ⅲ. ソークラテースの思い出 (英訳版第3編の2 The Memory of Socrates)

ソークラテースの思い出

1. 倫理的自由の使徒—ソークラテース

<訳文>

ソークラテースは、象徴的になっている不滅の人物の一人である。その実際の人、前469年ころに生まれ前399年に処刑されたアテーナイの市民であるが、歴史に入った途端にその人から (personality, Züge) の大部分を輝かせ、永遠の‘代表的な人物’となった。⁽¹⁾ 彼の人生を基礎づけていた信念のために被ることになった死ほどに、彼の人生 (life,

Leben) や彼の学説 (doctrine, Lehre) (彼が何らかの学説を持っているかぎりのことだが) が彼をそのように高名にしたわけではない。後のキリスト教の時代において、彼は前キリスト教徒の殉教者の王冠を与えられ、さらに宗教改革の時代の偉大なヒューマニスト、ロッテルダムのエラスムス⁽²⁾ は、大胆にも彼を自分たちの聖人のなかに数え、彼に 'Sancte Socrates, ora pro nobis' (おごそかにソクラテースよ、我々のために祈れ) と呼びかけたのである。しかしまさにその祈りは、それには教会と中世の追憶がくっついていっているのではあるが、ルネサンスに始まるあの新しい時代の精神を呼吸しているのである。中世においては、ソクラテースはアリストテレスやキケローによって言及された誉れ高い名前以上のものとはとても言えなかった。しかしルネサンスとともに、均衡の彼の側が急に上昇し、しかるにスコラ哲学の王者であったアリストテレスのそれは沈下した。⁽³⁾ ソクラテースは、あらゆる近代の (modern) 啓蒙と近代哲学の先導者になったのであり、教義 (dogma) に一切縛られず、伝統に一切束縛されず、自由に自分自身の足で立ち、良心の内なる声だけに耳を傾ける、倫理的自由の (of moral liberty, der sittlichen Freiheit) 使徒となったのであり—新しい現世の (of this world) 宗教と、我々自身の精神的な強さによって、つまり恩寵によるのではなく、我々自身の本性 (our own nature, des eigenen Wesens) を完成しようとする (to perfect, nach Vervollkommnung) 倦むことのない格闘によって現実の生に (in this life, im Leben selbst) 見出される至福 (a heaven, Glückseligkeit 幸福に充ちた状態) との、告知者となったのである。⁽⁴⁾ しかしこうした決まり文句は、彼が中世末期以来の諸世紀に対して意味したことを言い尽くすには不十分である。彼への頼み (appealing to him, sich auf ihm zu berufen 彼によりどこをを求めること) なしには、どんな新しい倫理的、宗教的な考えも生まれ得なかったし、どんな精神的運動 (spiritual movement, geistige Bewegung) も現れ得なかった。ソクラテースの復活は、単に学術的な関心の復興に因るのではなく、今や再発見されたギリシア人の著作に、とりわけクセノフォンの諸著作⁽⁵⁾ に述べられているような彼の精神と人格に対する純粋な熱狂に因るのである。⁽⁶⁾ <1>

<注記と考察>

- (1) アテーナイ市民は、ソクラテースを死刑に処してしまってから、彼の偉大な実像を知ることになる。この前後は、ソクラテースの「死」が社会に与えた影響のことが言われている。
- (2) エラスムス：1466年～1536年。オランダに生まれたルネサンス期の最大の人文学者で、ギリシア古典を研究し、著書『痴愚神礼賛』(1509年)では「王侯や教会の愚行を風刺し人間の尊厳と自由を強調」した(『岩波哲学・思想事典』)。
- (3) ここの、ソクラテース(プラトーン)への関心の盛衰の記述は、パイダイアー理念の本質を確認するものとなっており、極めて重要。
- (4) ソクラテースが「倫理的自由の使徒」となり、「あらゆる近代の啓蒙と近代哲学の先導者になった」という。ここで言われている倫理的なもの原型的転換、つまり人間の尊厳の意識化は、教育の本質認識そのものに相応することがらと考えるとよいだろう。
- (5) クセノフォーン：前430年頃～前354年頃。ソクラテースの弟子の一人で、彼の

著作には、ソクラテース像を伝えるものとしては、『ソクラテースの思い出』など四種類あるとされる(佐々木理訳『ソクラテースの思い出』岩波文庫、の「まえおき」)。第Ⅱ章4節<注記と考察>(2)を参照のこと。

- (6)ソクラテースの「精神と人格(mind and character, geistige Erscheinung 精神的な現れ)」そのものが、世界史において決定的な意味をもってきたことが分かる。このことは、教育の「思想」が、思想としてほんとうの生命力をもっていくことの意味を考えさせてくれる。

2. キリスト教の改革の歴史とギリシア哲学

<訳文>

しかしながら、中世がアリストテレスをキリスト教哲学全体の基礎となしたのに反し、ソクラテースの指導性のもとに新しい‘religion of humanity 人間性という宗教’を基礎づけるためになされた全努力はキリスト教に対立していた、という考えほど真実から遠いものはない。反対であって、異教徒の哲学者は今や、キリストの教えの不滅の内容がギリシア人の人間性の理念(ideal of humanity, Menschenideals)から採られた一定の本質的な特徴と融合する、近代文化(a modern culture, eine neuzeitliche Kultur)の創造を助けたのである。このことは、今や支配の地位に向けて突き進む、革命的な新しい人生の観方(view of life, Lebensansicht)によってもたらされたのであり—その観方は、いよいよ増大する人間理性(human reason, die menschliche Vernunft)への信頼(confidence, Vertrauen)と、いよいよ増大する新しく発見された自然の法則(law of nature, Gesetz der Natur)への畏敬(awe, die Ehrfurcht)から成り立っている。理性と自然(Reason and Nature, Vernunft und Natur)は、古典期の文化的洗練(classical civilization, der antiken Gesittung 古典期の洗練)の基礎であった。⁽¹⁾キリスト教がこれらの諸原理を引き継ぎ、それらを自分たちの一部にしようとして慎重に試みたとき、それは、その展開の初期の諸世紀以来してきていた、正にそのことをしていたのである。キリスト教の発展のいずれの新しい画期も、それなりに、人間と神の古典的な概念に異議を唱え克服してきたのである。この終わりのない過程において、‘理性 Reason’と‘自然 Nature’、そしてそれらの権利(rights, Rechte)の知的な弁護を請け負うことは一別のことばで言えば、‘理性神学 rational theology’あるいは‘自然神学 natural theology’の役割を果たすことは、(洗練された抽象的な思考の途方もない力をもつ)ギリシア哲学の役割であった。宗教改革が聖書の‘純粋な’形式にもどろうとする最初の真剣な試みをなしたあと、不可避的な反動と代償として、啓蒙の時代のソクラテース礼賛が続いた。その礼賛はキリスト教に取って代わろうとしたのではなく、あの時代の人間にとって不可欠だと思われた付加的な力をそれに与えようとしたのである。敬虔主義でさえ—純粋なキリスト教徒の、活気のないものへと硬化してしまっただけでなく、理性神学への反感による反乱であるが、ソクラテースの名前を頼みにし、彼を精神的な盟友であると信じたのである。ソクラテースはしばしばキリストと比較された。今日我々は、キリスト教徒の宗教と‘自然人 the natural man’との間の、ギリシア哲学によってもたらされる、あり得る和解の真の重要性を理解することができるし、そのような和解が、ソクラテースという人間に焦点化される古典文化(classical culture, der Antike)の像によってどれほど大きく助けられることに

なるだろうかということ判断することができる。

<注記と考察>

(1) 人間の理性と自然の法則の存在を洞察し、それに「信頼」をおくことは、「教育（実践）」の成立の根源に該当することである。むしろ、ソクラテース、プラトーンたちはこの「信頼」の根拠を意識し探究していった、と言うべきであろう。

3. ニーチェのソクラテース憎悪について

<訳文>

近代の始まりから、彼は一人の *anima naturaliter Christiana* の典型 (the pattern, Vorbild) として巨大な影響を与えてきた。しかし彼は、ニーチェ⁽¹⁾ がキリスト教を否定し超人の到来を宣言したとき、自分の名声に対し大きな犠牲を払う報いを受けた。ソクラテースは、非常に長く緊密に二元論的なキリスト教徒の理念に、それによって個々の人間は二つの別々の部分、つまり身体と精神、に分裂させられたのであるが、その理念につながっているように見えたので、彼はそれと一緒に落ちる他ないようになっていた。同時に彼に対するニーチェの敵意は、新しい装いをもって、エラスムスのヒューマンイズムの、生と人間性 (life and humanity, -menschentum 人間存在) はいくつかの抽象的な概念にまとめることができるというスコラ哲学的な考えに対する、古い憎悪をよみがえらせた。彼は、アリストテレスではなく、ソクラテースを、500年以上にわたりヨーロッパ精神を固くしばってきた、そして彼 (ショーペンハウエル⁽²⁾ の正統の弟子) がドイツ理想主義の学派に代表される神学的思考様式のなかにまだ作用していると考えた、堅苦しく知性を偏重するアカデミックな哲学の、その真の体現者と考えた。《2》彼は、このようなソクラテースの見方の多くを、ツェラー⁽³⁾ の、当時画期的であった彼の『ギリシア哲学史』において描かれた、哲学者の像に負っていたのであり、その著作はと言えば、西欧の精神が古典期の理念とキリスト教徒の理念との対立の和解によって発展してきたという、そのヘーゲル⁽⁴⁾ の弁証法的過程の再構成 (reconstruction, Konstruktion 構成) に影響を受けていたのである。今や新しいヒューマンイズムが宣言されたのであり、それは、この強大な伝統の威信と戦うことに取りかかったのである。それは、いわゆる‘前ソクラテース的 pre-Socratic’ギリシア精神 (Greek thought ギリシア思想, Griechentum) を発見し、それを神聖視したのである。<前ソクラテース的>とは、実際には<前哲学的>を意味した。ニーチェや彼の追隨者たちにとっては、あの古代の思想家たちは彼らの時代の偉大な詩人や音楽家たちと混ざり、‘ギリシアの悲劇的時代 The Tragic Age of Greece’ と題される一枚の合成的肖像画に溶け込んだのである。《3》悲劇的時代とその時代の作品においては、ニーチェが懸命に一体にしようとしたアポロ型とディオニュソス型の要素は、まだ奇跡的に結合されていた。身体と精神はまだ一つであった。あの青春のときに、名声高き古代ギリシアの調和 (後世の人間 (the men of the afterworld, den Epigonen エピゴネン) によって非常に浅薄に理解された) は、危険な計り知れない深さを下に隠し、まだ静かな鏡のような水面であった。しかしソクラテースが理性、つまりアポロ的要素、の勝利をもたらしたとき、彼は、それが非理性的なディオニュソス的要素と釣り合いをとっていた緊張関係を破壊したのであり、そのようにして

調和を壊したのである。彼は（とニーチェは言い放つ）古代のギリシアによって抱かれていた悲劇的世界観（view of life, Weltansicht）を取り上げ、それを倫理的にし（ethical, moralisiert 倫理的考察を加え）、それを知的にし（intellectual, intellektualisiert もっぱら知的に判断しようとし）、それを学術の団体にした（an academic corpse, verschulmeistert 学校教師化した）。⁽⁵⁾「4」後期のギリシア人のエネルギーを浪費した、理想化し（idealizing, Idealismus）、倫理化し（moralizing, Moralismus）、そして精神化する（spiritualizing, Spiritualismus）というあらゆる妄想（vapour）は、ソクラテースの頭脳の中から紡ぎ出されたのである。彼は、キリスト教徒の思想では、‘自然 Nature’の許容され得る最大限度だと見なされてきたのだが、今やニーチェは、彼は実際にはギリシア人の生活から自然（Nature, die Natur）を追い出し、その場所に不自然なもの（the Unnatural, die Unnatur）を置いたのだと断言した。このようにソクラテースは、19世紀の理想主義者たちが彼らの歴史像のなかで彼に与えた、最上位のとまでは言わないにしても確かな位置を奪われ、もう一度、今日の知的な闘争のなかに引き込まれたのである。再び彼は、17世紀、18世紀においてしばしばそうであったように、象徴となったのであるが、しかし今度は否定的な象徴、つまり墮落と失敗の（of corruption and defeat, des Verfalls 頹廢の）あらわれということであった。⁽⁶⁾

この強大な攻撃のために選び出されることは、ある意味では、ソクラテースにとって名誉であったのだが、このことは彼の本当の重要性についての論争の激しさを増大させた。ニーチェの荒々しい偶像破壊的な判定が正しいか否かにかかわらず、ソクラテースが自らの力とそして挑戦を失っていなかったということは、長らくしてなお第一の兆候であった。超人が彼を、自分自身の存在の（of his own existence, in seiner inneren 自分の内的な）安全にとって、危険な脅威と感じたのである！我々は、ニーチェが新しいソクラテース像を描いたとは、ほとんど言うことはできない。鋭い歴史意識のこの時代において、歴史的人物の新しい像を描くことは、ニーチェがソクラテースを彼の時代と彼の具体的な環境からほとんど完全に切り離して為したことは、正反対の何かを意味するのである。⁽⁷⁾しかし疑いもなくソクラテースは、極めて偉大な人物であるということをはるかに超えて、彼自身の歴史的な文脈において判断されるべきである。つまりソクラテースは、彼自身の時代によって自らに与えられた職務にあまりにも没頭していたので、彼は後世の人びとに対してたったの一行も残してはくささらなかったのである。⁽⁸⁾現代の生活の過度な合理化に対する情け容赦のない戦いにおいて、ニーチェはソクラテースの時代の精神的な困難さに対しては興味も共感も（nor sympathy for, noch geduldiges Verständnis 辛抱強い理解力も）持たなかった。それにもかかわらずあの危機は（われわれが、‘アテネの魂の危機 the crisis of the Athenian soul’（‘Krisis des attischen Geistes’）と述べてきた）、ソクラテースを配置するために歴史が選んだ瞬間であったのであり、運命はそれを彼の人生の背景にしたのである。しかしたとえソクラテースが主として彼の時と場所との関係で判断されるにしても、まだ彼を誤解する多くの可能性があつて—このことは、近ごろ世に供されている多くのソクラテース像からも明らかなことである。考察の不確かさやとっぴさは、彼を論じる場合は、古典思想の全歴史における他のいかなる論点の場合よりも、よりありふれたものである。我々はそれゆえに、我々の論議を基本的な事実から始めなければならない。

<注記と考察>

- (1) ニーチェ Friedrich Wilhelm Nietzsche : 1844 年～ 1900 年。著書『悲劇の誕生』以降の諸著作で、ソクラテース、理性、キリスト教を批判していった。イエーガーによるこの段落のニーチェ批判は、ニーチェのソクラテース論が主観的であるというものである。イエーガーの古代研究がこのような次元の批判を可能にしている、と判断される。
- (2) ショーペンハウエル Arthur Schopenhauer : 1788 年～ 1860 年。彼の「非合理的主意主義」などを唱える哲学体系は、ニーチェ等、多くの思想家に影響を与えたとされる（『岩波 哲学・思想事典』）。
- (3) ツェラー Eduard Zeller : 1815 年～ 1908 年。ドイツの哲学者、ギリシア哲学史家。その訳書として、『ギリシャ哲学史綱要』（大谷長訳、未来社、1955 年）がある。
- (4) ヘーゲル Georg Wilhelm Friedrich Hegel : 1770 年～ 1831 年。
- (5) 「学術の団体」は an academic corpse (verschulmeistert 学校教師化した) の訳である。イエーガーがニーチェのソクラテース理解を批判的に説明している件であるが、もともと古代ギリシア人の生活と文化のなかにあったものの観かた（「古代のギリシアによって抱かれていた悲劇的世界観」）が理性によって吟味され、倫理的に考察され、知的に判断され、学術集団が説くものにされてしまった、という意味合いであろう。この「学術の団体（集団）」は、ソクラテースを中心にした哲学的問答を交わし合う人びとのこと、あるいは当時のさまざまな哲学の学派、学校、さらにはプラトーンの学園「アカデーメア」などまで含めて受け止めてよいのだろう。
- (6) 世界史における思想の原理的論争は、ソクラテース（プラトーン）評価の問題に帰着していくようである。19 世紀に、その評価の逆転を経験することになるが、イエーガーは、さらに続けて、ニーチェの古代思想解釈は非歴史的な主観的曲解だと厳しく批判する。
- (7) イェーガーが示しているニーチェ批判の観点は、パイデイアー研究の基本的方法のことでもある。
- (8) イェーガーは、ニーチェがソクラテースを「彼の時代と彼の具体的な環境からほとんど完全に切り離して」理解したことに対し、ソクラテースの存在の核心はその「歴史的な文脈」にある、と批判している。つまりイエーガーは、「後の者に対してただの一行も残してはくたさなかった (did not deign to leave)」方、ソクラテースは、その具体的状況において理解されることを求めている、と指摘する。

<原文注記>

1. ソクラテースの影響の歴史を書くことは途方もない仕事となるであろう。次善の可能性は、それを別々の時期に分割しそれらを個別に扱うということになるだろう。そのような分割した扱いの一つが、B. ボエームの、Sokrates im achtzehnten Jahrhundert（『18 世紀のソクラテース』）: Studien zum Werdegang des modernen Persönlichkeitsbewusstseins (Leipzig 1929)、である。
2. ニーチェのソクラテースに対する憎悪は彼の処女作、Die Geburt der der Tragödie aus dem Geist der Musik（『音楽の精神からの悲劇の誕生』）、にも現れており、そこ

で彼はソクラテースを純然たる‘理性と科学’の象徴として扱っている。この著作の元の手稿を印刷したものは(最近 H.Mette によって出版される、ミュンヘン、1933)、これはワーグナーと現代オペラを扱ったくだけは含んでいないが、まさにその表題の Sokrates und die griechische Tragödie (『ソクラテースとギリシアの悲劇』)に、ニーチェがソクラテースの理性的精神とギリシア人の悲劇的な世界観との間の重大な対照のことを考えていたということ、を現している。(1) 彼がこの主題に心を奪われていることは (his preoccupation with this subject, diese radikale Fragestellung selbst この根底的な問題提起そのものは)、彼のギリシア精神を理解し熟達しようとする生涯にわたる格闘との関係なしには的確に認識することはできない。E. シュプランガーの、Nietzsche über Sokrates, in 40 Jahrfeier Theophil Boreas (Athens 1939)、を参照のこと。

3. 早期のギリシア哲学者たちについてのこの新しい概念 (ニーチェの初期の論文、Die Philosophie im tragischen Zeitalter der Griechen (『ギリシアの悲劇的時代の哲学』)、に特徴的に描かれている)は、ツェラーの、彼の『ギリシア哲学』第1巻のなかの、ソクラテースの学徒たち以前に対する歴史学的叙述で導入されてはいないし、ヘーゲルとショーペンハウエルの哲学でさえもそうである。ヘーゲルの、絶えず解決されていく矛盾の理論はヘーラクレイトス (2) を受け継いでいるし、ショーペンハウエルの意思の学説は本質的に前ソクラテース的な思考類型に非常によく似ている。
4. これらの信念をもってニーチェは、アリストファネス (3) がソクラテースに対して‘ソフィスト’であるとして浴びせた、その批判において、確固としてアリストファネスを味方した。Cf. Paideia I ,370f.

<注記と考察>

- (1) 「手稿を印刷したもの」は、printer's MS. の暫定訳である。ここにくだりの、「重大な対照のこと」は、profound contrast between, die innere Entscheidung zwischen (いずれを取るかの内心の決断) の訳で、イエーガーは、ニーチェが二つの選択において根底的な判断をしようとしている、と観察している。

なお、ソクラテース(前470/469年～前399年)とアッティケー悲劇との関係を理解するために、その三大悲劇詩人の(作品は略し)生没年のみを確認しておくこと次のようである。

アイスキュロス：前525/524年～前456/455年。

ソフォクレス：前496年頃～前406末頃。

エウリピデース：前485/480年頃～前406年頃。

- (2) ヘーラクレイトス：前540年頃～470年頃。ギリシアのエペソスの哲学者で、万物流転を唱えたとされるが、「変化を通じて保たれている世界の統一性・秩序性」を洞察していると評されている(『岩波 哲学・思想事典』1998年)。
- (3) アリストファネス：前445年頃～前385年頃。本継続研究(3)の第Ⅱ章4節<注記と考察>(8)を参照のこと。

＜全体の考察 [B]＞

ここでは、イエーガーのパイデイアー研究を理解していくことを主眼として、また私たちの教育研究の原理的考察の可能性を探ることを目標とし、二、三の点を簡略に確認しておく。

[1] まず注目しておきたいことは、古代ギリシア思想における、前399年のソクラテースの刑死がもっている深甚な意味についてである。

第1に、ソクラテースは「歴史に入った途端にその人がらの大部分を輝かせ、永遠の‘代表的な人物’となった。」とイエーガーが述べているように、アテーナイ市民は、そしてソクラテースを死罪に評決した裁判官たちの多くも、ソクラテースその人のことをほとんど正確には理解していなかった、ということである。『ソクラテースの弁明』（岩波文庫）の訳者久保勉は「解説」で、ソクラテースがソフィストの一人として受け止められていたことなど、ソクラテースを死に追いやったアテーナイの政治的、社会的状況を、注意力をもって述べている。

第2に、『ソクラテースの弁明』、そして『クリトーン』、その他の対話篇、それらはプラトーンの比類のない詩的・文学的才能に負っているようであるが、それらを読むと、ソクラテースの「(刑)死」が、若いプラトーンの魂深くに火をつけたことがありありと伝わってくる。つまりソクラテースの「死」は、プラトーンの初期、中期、後期の全対話篇の展開を根底において促す、原点となる事件だったのである。そしてそのプラトーンが、古代ギリシア思想の絶頂期(4世紀)のコアを成しているのである。

第3に、ソクラテースが後世にとって不滅の人となったのは、その「教義」によるのではなく、その「死」に意味があるということである。その本質についてイエーガーは、「ソクラテースは、あらゆる近代の啓蒙と近代哲学の先導者になったのであり、教義に一切縛られず、伝統に一切束縛されず、自由に自分自身の足で立ち、良心の内なる声だけに耳を傾ける、倫理的自由の使徒となった」のだと説明している。ソクラテースが示したことは、来世や神に希望を託すような性質のものではなく、「我々自身の本性を完成しようとする倦むことのない格闘によって現実の生に見出される至福」が実存する、ということであった。このようにソクラテースの死は、世界史に向けて、「個人」(人間の尊厳)の存在をありありと示したのである。⁽¹⁾

[2] イェーガーは、彼のパイデイアー研究の趣旨に関わっているが、キリスト教改革と古典期ギリシア思想との歴史的な関係に目を向け、そこにキリスト教改革の本質を覗いてこうとしている。このことについて、以下の二点を確認しておきたい。

第1に、イエーガーは、「異教徒の哲学者」は今や、「キリストの教えの不滅の内容」と「ギリシア人の人間性の理念から採られた一定の本質的な特徴」との融合である「近代文化」の創造を助けた、と一般化して述べている。その近代文化を成り立たせている「革命的な新しい人生の観方」とは、「いよいよ増大する人間理性への信頼と、いよいよ増大する新しく発見された自然の法則への畏敬から成り立っている。」とする。

第2に、この「理性」と「自然」に「信頼」を置くということは、繰り返し「ソクラテースの名前を頼み」にするキリスト教改革の歴史を貫く生命力なのだと言われているが、近現代のヒューマニズム、教養・教育の思想のまさに根幹に該当することであ

る。このような、イエーガーが解き明かしていこうとする（とくに初期キリスト教とパイデイヤーとの内的な関係を捉えようとする研究において）、キリスト教におけるヒューマニズムをめぐる格闘の歴史は、教育思想研究の重要な一部となる。⁽²⁾

[3] イェーガーによる、ニーチェのソクラテース憎悪に関する論述は、いくつかの意味をもっている。

第1に、ニーチェは、古代ギリシア社会に抱かれて在った「悲劇的世界観」を、ソクラテースが「倫理的」にし、「知的」にし、「学術団体化」した、(あるいは、理想化し、倫理化し、精神化した、あるいは、「身体」と「精神」とを二分化した、あるいは、ギリシア人の生活から「自然」を追い出し「不自然」なものを置いた)と解釈した。イエーガーはこうしたニーチェの解釈を、ソクラテース像はさまざまにあるが、その偏見の像の典型として批判している。

第2にイエーガーは、ニーチェが、500年以上ヨーロッパ精神を固くしぼり、さらに自ら「ドイツ理想主義の学派に代表される神学的思考様式のなかにまだ作用している」と考えた、「堅苦しく知性を偏重するアカデミックな哲学」の、その真の体現者として、アリストテレスではなく、ソクラテースを考えたことに目を向けている。さらにイエーガーは、ニーチェのソクラテース批判の正否にかかわらずなく、「超人が彼を、自分自身の存在の安全にとって、危険な脅威と感じたのである！」とニーチェを痛烈に批判している。このようにしてイエーガーは、この短い文章のなかにも、近現代思想がソクラテース評価をめぐる動いているさまを描き出している。

ソクラテースは2千年を超え、今日も「自らの力とそして挑戦」を保持し続けていると、我々は考えてよいのだろう。

第3にイエーガーは、ソクラテースを歴史的に理解していくという課題を強調している。ソクラテース自身は「たったの一行」も書き記さなかったのであり、「不確か」で「とっぴ」なソクラテース像が生じ得る。しかしイエーガーは、その書き記さなかった理由について、ソクラテースは「彼自身の時代によって自らに与えられた職務にあまりにも没頭していた」のだと指摘し、彼を理解するとは、「運命」が彼を配置したポリス・アテーナイのその歴史的「瞬間」を理解することでなければならない、と述べている。このことは、恣意的な解釈を許さない、イエーガーのパイデイヤー研究の方法論そのもののことでもある。

[4] 上述のようにイエーガーは、ソクラテースの「死」とともに、その後の世界史における（キリスト教改革やニーチェ批評を含む）「(ソクラテースの)復活」の曲折を論じており、しかもその見解は立ち入ったものとなっている。

このようにイエーガーの古代研究は、「古代(社会)」のみに専門的に閉じこもるようなものではなく、また「現代(社会)」に唐突に古代思想を持ち込むといったものでもない。イエーガーは自分の古代研究の趣旨に関わって、古典古代が「現代世界に直接的に及ぼしている影響」に注意を払うことの重要性を述べているし(本継続研究(2)の第Ⅱ章12節)、また著書『パイデア』の意図について、「この本は学者にだけではなく、千年間の文明を維持しようとする我々の時代の奮闘のなかにあって、ギリシアに近づく術を再発見しようとするすべての人びとのためにも向けられている。」(本継続研究(3)の第Ⅱ章1節)と記してもいる。この「ギリシアに近づく術」ということは、いずれの

時代も、そしてこの私たちの現代も、さまざまな思想的課題（諸矛盾）に向かいながら、基底部において切実に求めているものなのである。

この「ギリシアに近づく術」は、古代社会と世界史的な現代との双方に関わることであり、果てしなく専門分化が進むという歴史の必然性のなかにあつて、一般的に、容易なこととは思われない。しかしイェーガーのパイデイアー研究は、この把握することが容易ではない、古代社会以降の世界史の基部にある深い連続性について想起させてくれるのである。

<注記>

(1) 古代ギリシア人は共同社会との関係で教養・教育を意識していったが、彼らは前4世紀に入り「国家と個人の関係について懸命に考えた」（小論第Ⅱ章3節）のであり、そこから human nature（人間性）の概念を深め、個人の価値（＝人間の尊厳）を見だしていったのである（本継続研究(2)の第Ⅱ章4節）。そのようなイェーガーによる古代ギリシア思想の歴史的研究からは、日本国憲法第13条（個人の尊重、幸福追求権、公共の福祉）の規定を、教養・教育・社会教育の根幹の思想的規定として読む、という課題が意識されてくる。たとえば栄村（長野県）の高橋彦芳の、住民の自由と自治を重視した村づくり実践は、氏の憲法13条の理念を根底に据えた社会教育実践の思想と一体的であり、格別に注目される（高橋著『田舎村長人生記—栄村の四季とともに』本の泉社、2003年、62p、169～198p）。

このことについては、ここではこれ以上の考察はできないので、憲法と教育基本法（旧法）における「個人」の規定の文言だけを抜粋して確認しておく。

・日本国憲法第13条：

「すべて国民は、個人として尊重される。生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利については、公共の福祉に反しない限り、立法その他の国政の上で、最大の尊重を必要とする。」

・教育基本法前文：

「…われらは、個人の尊厳を重んじ、…」

・教育基本法第1条（教育の目的）：

「教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたつとび、…」

なお、ここで教育基本法の旧法を引いているのは、それが少しも生命力を失うことなく今も生きている、という筆者の判断があるからである。教育基本法の再改正を目指し広く深い論議を重ねていくことは、私たちの具体的な実践的課題である。本継続研究はこのことの真理性をいっそう鮮明にする。畑・草野滋之編『表現・文化活動の社会教育学—生活のなかで感性と知性を育む—』（学文社、2007年4月）の「まえがき」の<1. 教育基本法「改正」と本書の位置>、および「第Ⅰ章 世界にかかわって生きることと内的なものへの憧憬と—社会教育・生涯学習の哲学を考える」を参照されたい。

さて、小論では論究しないが、自由民主党の「日本国憲法改正草案」（2012年4月27日）では、現行法第13条の「すべての国民は、個人として尊重される。」を「全

て国民は、人として尊重される。」に改めるとしている。

- (2) キリスト者とヒューマニズムとの間に在る内在的關係については、近現代日本においても探究されるべきことがらである。戦後改革期を思想的にリードした南原繁については、拙論において、「南原繁の思想と憲法・教育基本法」ということで論及した（「ヒューマニティの思想の現代性について—ギリシア的パイダイアー（教養）の再生を考える—」、教育科学研究会編『教育』2008年2月号、所収）。また、精神科医である神谷美恵子の世界に関しては、拙論において、「人間的なもの（ヒューマニティ）への問いと教育の病理」ということで論及した（「〈人間〉への問いと地域文化の創造—ギリシア思想の継承を考える—」、都留文科大学社会学科編著『地域を考える大学—現場からの視点—』日本評論社、1998年、所収）。

Received: December 04, 2015

Accepted: December 08, 2015